

[Material]

Psychological Process of Public Health Nursing Students Completing the One-Year Course Under the Influence of COVID-19 Pandemic

Sayuri Kitamoto*, Shizu Nozaki*, Yuko Yamashita* and Kazumi Kajimoto**

* Department of Community Health Nursing, Aino University Junior College

** First Department of Nursing, Aino University Junior College

Abstract

The purpose of this study was to clarify the psychological process of public health nursing students completing the one-year course under the influence of COVID-19 pandemic. Semi-structured interviews were conducted with 11 students enrolled in the 2020 academic year and analyzed using M-GTA. Immediately after entering the school, the students felt anxious and isolated due to doubts about their career choices. In addition, due to the shortened clinical training, they felt anxious and apologetic about whether they would be useful in the workplace as public health nurses, tending to evaluate themselves lowly for not having acquired sufficient knowledge and skills. Yet, they were also positive about the fact that public health nurses were now known to the public due to their responses to the COVID-19 crisis, and they felt proud of their senior public health nurses struggling to perform work that was needed in society. Public health nursing students who studied under COVID-19 pandemic were highly anxious about their lack of knowledge and skills. It will be difficult for them to enhance their self-affirmation as public health nurses. Therefore, it is necessary to provide them with on-the-job-training that includes practical training as early as possible after the employment for having them feel that they are improving their knowledge and skills.

Key Words : public health nursing student, psychological process, one-year course, COVID-19

新型コロナウイルス感染症影響下において一年課程の 保健師学生が学修する際の心理プロセス

北本 さゆり*, 野崎 志津*, 山下 裕子*, 梶本 和美**

【要 旨】

COVID-19 影響下で、一年課程で学ぶ保健師学生がどのような心理プロセスで学修したのかを明らかにすることを目的とした。2020 年度に入学した学生 11 名に半構造化面接を実施し、M-GTA を用いて分析した。学生は、入学直後は自分の進路選択に疑念が生じ不安が高まり孤立感を抱いていた。また、実習の短縮により、保健師として働く際に職場で役に立てるのかといった不安や申し訳なさを感じており、十分に知識や技術を獲得できていない自己を低く評価する傾向にあった。同時に保健師が COVID-19 対応により世間に周知されるようになったことを前向きに捉え、社会で必要とされている業務に奮闘する先輩保健師の姿を誇らしく感じていた。コロナ禍で学んだ学生は、知識・技術不足に関する不安が強く、保健師としての自己肯定感が高められにくいことが推測される。入職後できるだけ早期に実践を兼ねた OJT (On the Job Training) を行い、知識・技術を向上させている自己を感じてもらう必要がある。

キーワード：保健師学生、心理プロセス、一年課程、COVID-19

I. はじめに

世界中に脅威をもたらしている新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19 とする）は、2020 年 1 月 16 日に日本国内で初めて患者が報告され、2 月 1 日に指定感染症に指定された。3 月下旬から国内の患者数は増加し、4 月 7 日には改正新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき緊急事態宣言が発出された¹⁾。COVID-19 の感染拡大を懸念し、文部科学省・厚生労働省から、医療関係職種等各養成機関において、やむをえず実習等の実施が困難となる場合には、学生の修学に不利益が生じることのないよう配慮した上で演習または学内実習に代替可能であるという旨が示され²⁾、また、授業の弾力的な取扱いの具体的な取組事例や個々の学生等の状況に応じた学修機会の確保等の

必要性が明示された³⁾。

ところで、保健師教育課程は看護師免許取得後に公衆衛生看護に特化して教育を行う上乘せ過程として 1 年間の教育を行う養成所もしくは短大専攻科、2 年間の教育を行う大学院、4 年制大学または専修学校における保健師選択コースなど多様なコースが存在している⁴⁾。このように多様な教育施設・機関で学修する保健師学生が学ぶべき内容を示したものが「公衆衛生看護学モデル・コア・カリキュラム 2017」⁵⁾ である。これは、保健師として求められる基本的な資質・能力、公衆衛生看護の対象理解に必要な基本知識、公衆衛生看護技術や活動、臨地実習などのねらいや学修方法を提案したものであり、社会の多様な健康課題に対応できる保健師の養成をめざしている。しかし、現状の教育体制では全てを達成することは困難であることから、

* 藍野大学短期大学部専攻科（地域看護学専攻）

** 藍野大学短期大学部第一看護学科

各教育機関は、学修時間数の3分の2程度を目安として、このカリキュラムを参考に科目の設定、教育手法、履修順序等を組み立て、残り3分の1は、3つのポリシーとの整合性を図りながら授業を編成することが求められている⁵⁾。

社会の多様な健康課題に対応できる保健師を養成するために、各教育機関では、より効率的効果的に学修できるようカリキュラムを組み立てているが、COVID-19の蔓延により、2020年度は感染予防とのバランスを考慮したカリキュラムの編成を余儀なくされた。具体的には、対面授業を遠隔授業に切り替えたり、演習時間を減らしたり、臨地実習を学内演習に替えたりといったことである。さらに、このカリキュラムの変更は、教育機関内の感染者の有無、濃厚接触者の有無、実習受入れ機関側の状況変化等に応じて幾度となく繰り返されることとなった。

多様なコースが存在する保健師教育課程の中でも、一年課程の教育機関では緊急事態宣言発出と入学時期が重なり、同級生との対面交流がないままに授業が開始すること、その状況下で就職活動が開始すること、一年間で必要な知識や技術を習得しなければならないことから、学修が極めて困難なことが推察される。また、COVID-19の感染拡大により、保健所等で身を粉にして働いている保健師の姿を目の当たりにし、数か月後にはそのような状況に身を置くことに葛藤や不安などを抱いていると考えられる。

このような背景を踏まえ、COVID-19影響下で、一年課程で学ぶ看護師資格を持った保健師学生が、どのような心理プロセスで学修してきたのかを明らかにすることを本研究の目的とする。本研究により、学修方法や実習期間が限られた中で、学生が保健師として就業するというモチベーションを保ちながら学修するための効率的効果的な方法を提示することができる。とともに、卒後必要となる継続教育を示すことができる。さらに、これらを平常時での学修のあり方に還元することができる。と考える。

II. 研究 方 法

1. 研究参加者

一年課程の保健師教育課程であるA教育機関で学修した学生を対象とした。対象となる学生全員に研究の趣旨について説明し、書面上同意の得られた対象者を研究参加者とした。

研究参加者は男女11名であり、年齢は20代9名、

30代2名である。A教育機関に入学する前に看護師として就業していた者は7名であった。また、インタビューの時点で保健師として就業する予定である者は8名、看護師として就業する予定の者は3名であった。

2. データの収集方法

事前にインタビューガイドを作成し、研究参加者に各1回の半構造化面接を実施した。面接時間は1回おおよそ40分から60分である。面接方法は、対面での面接を基本とし、研究参加者の希望によりオンラインでの面接も実施した。インタビュー内容は、保健師教育についての入学前の思い、対面授業開始前後の思い、夏期休暇を過ごした場所と心情、例年より大幅に短縮された地域臨地実習（以下、臨地実習とする）に対する心情、コロナ禍での就職活動の実際と心情、マスク等で流れる保健師の姿を見て思うこと、保健師として働くことについての思い等であった。データ収集は2021年2月から3月にかけて行った。

3. 分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAという）^{6,7)}を用いて分析した。本研究は人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究であること、研究対象とする現象がプロセス的性格を有していることから、プロセスを構造的に捉えることができ、かつ重要な語りについて文脈を切り離さずに分析することができる手法であるM-GTAを用いることを選択した。ここで、分析焦点者を「一年間の上乗せ課程で学ぶ看護師資格を持った保健師学生」とし、分析テーマを「COVID-19影響下で、保健師学生が就職活動を行いながら授業や実習に参加し、必要な知識や技術等を修得する際の心理プロセス」と設定した。インタビューから逐語録を作成し、逐語録の中から、分析焦点者と分析テーマに照らしてデータの関連箇所に着目し、概念名、定義、具体例を記入した分析ワークシートを概念ごとに作成した。すべてのデータから類似例や対極例を抽出し比較検討しながら概念を作成し、生成した概念と他の概念との関係を検討した。さらに、複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、データからこれ以上新しく概念やカテゴリーが生成されないことを確認して、カテゴリー相互の関係をみて分析結果をまとめた。

4. 倫理的配慮

研究参加者には、研究の趣旨を理解していただいた

上で、参加の有無については研究参加者の自己決定とした。また、研究の参加途中でであっても、いつでも辞退できること、辞退したことにより不利益が生じることは一切ないこと、その際の収集データについては廃棄を希望される場合は廃棄することを約束した。研究で収集したデータから作成した逐語録は、個人が特定されない形に変え、それらのデータは研究目的以外に使用することは一切なく、情報の秘密を守り厳重に保管し、研究が終了すれば廃棄することとした。なお、本研究は藍野大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得て実施した（倫理委員会承認番号20008）。

Ⅲ. 結果と考察

11人のインタビューから得られたデータをもとに、分析テーマに該当する概念と、複数の概念を関連させたカテゴリーを生成した。生成された概念数は19で、カテゴリー数はサブカテゴリーも含めて6であった。それらを時間の経過に沿って配置し分析した。

M-GTAは、質的データを元にした深い解釈を重視する分析方法であるため、分析結果と考察をまとめて記述する。なお、生成したカテゴリーは【 】, 概念は『 』で示す。

得られた結果から、COVID-19影響下において一年課程の保健師学生が学修する際の心理プロセスを図1に示す。

一年課程の教育機関で学ぶ保健師学生は、COVID-19の影響を受けて、【自粛で始まり自粛で終わった一年間】を過ごすこととなった。それでも、保健師になりたいという思いで、【学び初めから地域臨地実習へ】と学修を進め、さらに、保健師学生として初めて保健師と出会い、【保健師活動を我が事として捉える】ようになり、【「保健師になる」というゴールに近づいていく】こととなった。自粛生活の中でも、対面授業が始まるまでの【慣れない遠隔授業に対応する】ことは、ひとつの大きな障壁でもあった。

自粛に伴う孤立感や不安を増強させるものではあったが、自粛を続けながらも教育機関で学修を行うことは将来への期待へと繋がっていた。一方で、【「保健師になる」というゴールに近づいていく】道程において、自粛による実習や演習の短縮・変更等から実践力を十分に身につけられていない自分を回顧し不安に陥ることとなる。このように不安から期待へ、現実から不安へという心理的变化を繰り返し、【不安を抱きながらなりたかった保健師になる】ことを目前に控えていた。

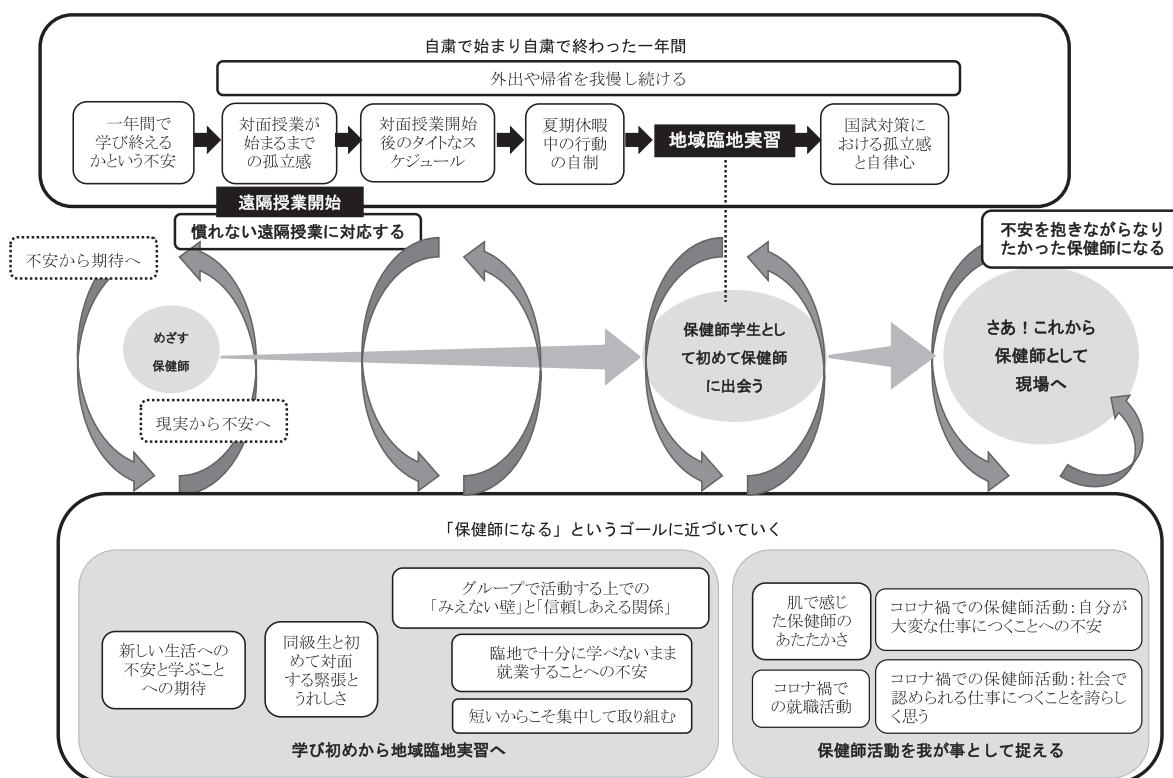


図1 COVID-19影響下において一年課程の保健師学生が学修する際の心理プロセス

1. 自粛で始まり自粛で終わった一年間

ここでは、『一年間で学び終わるかという不安』『対面授業が始まるまでの孤立感』『対面授業開始後のタイトなスケジュール』『夏期休暇中の行動の自制』『国試対策における孤立感と自律心』『外出や帰省を我慢し続ける』という6つの概念が抽出された。

入学直後に緊急事態宣言が発出され、授業開始が遅延したことで、学生は『一年間で学び終わるかという不安』を抱いていた。一年で修了できる教育機関を選択した学生は、少しでも早く保健師になりたいという思いが強く、看護師経験者は、キャリアを中断してまで選択した大切な一年であるため、その思いは殊に強く感じていた。

入学しても授業開始当初はすべてが遠隔授業であり、学生は、『対面授業が始まるまでの孤立感』を強く感じていた。同級生との繋がりが少ないため、授業に関する情報を共有することができず、授業でわからないことも自分だけがわからないのではないかという不安に駆られており、気軽に相談できる友人と繋がる前の自粛が、孤立感を増長させていた。その後は遅れがちのペースを取り戻すため、『対面授業開始後のタイトなスケジュール』で授業が展開され、夏期休暇が短縮されるとともに、授業・実習・研究・就職活動を並行して行うことを余儀なくされた。学生からは、この間多忙ではあったが、同じ目標に向かう同級生との協働作業により乗り越えることができたという思いが表出された。

遠方から来ている学生は、平常時であれば夏期休暇中に帰省することが多い。また通学圏内に実家がある学生も、アルバイトや旅行などリフレッシュする時間を持つことができる。しかし、コロナ禍では他者に感染させたくないという思いで、『夏期休暇中の行動の自制』を実践していた。非蔓延地域出身の学生は、自身が感染源となり故郷で感染を拡げることを危惧し帰省を我慢していた。

国家試験対策においても単独で自宅学習することを求められた。学生は、『国試対策における孤立感と自律心』を抱きながら、自宅で試験勉強に精励していた。

このように、学生は、入学から卒業までの一年間『外出や帰省を我慢し続ける』こととなった。自粛については、社会情勢上仕方がないものと受け止め忠実に実践していた。一年間のうち特に孤立感が増していたのは、対面授業が始まるまでの時期であったが、友人と離れる夏期休暇中や国家試験直前時期も孤立感が

高まっていた。

2. 慣れない遠隔授業に対応する

ここでは、『集中力が続きにくいオンデマンド授業』『遠隔授業の際の孤立感を和らげる方策』『繰り返し視聴できたオンデマンド授業』という3つの概念が抽出された。遠隔授業では主にオンデマンド型が採用され、対面授業開始後も、登校日をできるだけ少なくするために対面遠隔併用（ハイブリッド）型授業が行われた。

オンデマンド授業の利点は、『繰り返し視聴できる』ことである。聞き漏らしたことや、重要なポイントを改めて聞き直すことができる。オンデマンド型は国家試験対策や公務員試験対策講座でも取り入れられ、いずれも繰り返し視聴できるという利点が述べられていた。一方で、メリハリが利きにくく『集中力が続きにくい』ことがデメリットとして語られた。

学生は個々に、『遠隔授業の際の孤立感を和らげる方策』を考え実行していた。見知らぬ土地に一人で住み始めたという学生は保健師の重要なスキルである地区踏査を兼ねてウォーキングを実施していた。また、看護師免許を持っているという強みを活かしたアルバイトを行ったり、オンライン授業で同じグループになった人と連絡を取り合ったりしていた。オンライン授業については、Zoomで繋がりたいという意見がある一方で、知らない人と画面越しに話すのは気恥ずかしいといった声もあることから、Zoomを活用する際に、教員が学生の表情等をみながらコーディネートする必要性があるといえる。

3. 「保健師になる」というゴールに近づいていく

ここでは、『学び初めから地域臨地実習へ』と『保健師活動を我が事として捉える』という2つのサブカテゴリーが抽出され、公衆衛生看護を学び始めてから保健師資格を取得するというゴールへと進む過程における思いが語られている。

それぞれ、『新しい生活への不安と学ぶことへの期待』『同級生と初めて対面する緊張とうれしさ』『グループで活動する上での「みえない壁」と「信頼しあえる関係』』『臨地で十分に学べないまま就業することへの不安』『短いからこそ集中して取り組む』という5つの概念と『肌で感じた保健師のあたたかさ』『コロナ禍での就職活動』『コロナ禍での保健師活動：自分が大変な仕事につくことへの不安』『コロナ禍での保健師活動：社会で認められる仕事につくことを誇らしく思う』という4つの概念が抽出された。

社会人から学生へ立場が変わること、学校近辺への転居、初めての一人暮らし、まったく知らない同級生のなかで過ごすことなど学生は、『新しいことへの不安』を感じていた。同時に、保健師資格取得に向けて『学ぶことへの期待』もあった。特に、入学時から保健師の具体的なイメージを描いていた学生からは、それに向かって学ぶことができるという喜びが多く表出された。

夏休みを前に、緊急事態宣言が解除され感染者数も減少したことにより、ようやく対面授業が開始された。学生は、『同級生と初めて対面する緊張とうれしさ』を感じていた。学生は年齢幅が大きく、全国各地から集まることから、クラスに馴染めるのかを最も危惧していた。入学後すでに3か月を経過してからの初対面であり、短期間で臨地実習の準備等演習が行われるため、焦りが不安の要因にもなっていた。Zoomでの授業は学生同士を繋ぐ役割を果たしたものの、画面越しという障壁があることは否めない。そのため、対面授業開始後は授業内で学生同士を繋いでいく工夫が必要である。感染予防という点では内容的に限られるが、保健師教育機関という特殊性を鑑みれば、それを工夫すること・実践すること自体が学修の場であるといえる。

臨地実習は短期間となったが、その分、実習準備や学内演習に通常以上の時間を費やすこととなった。学生はグループ活動を通して協働の大切さを感じながらも、その一方で難しさも痛感しており、年齢幅が大きい集団の中での自分の立ち位置を見極めた上で、自分の担うべき役割を実践しようとしていた。集団から求められる役割と個々が実践する内容とが合致し、それがうまく機能できれば「みえない壁」は薄くなり、信頼しあえる関係に発展していくと考えられる。

実習期間が通常の5分の1に短縮され、『臨地で十分に学べないまま就業することへの不安』が語られた。それは幅広い業務の中で実習中に参加できる事業に限られたことによる漠然とした不安であり、卒後保健師として就職を予定している人に多くみられた。同時に、短期間であるからこそ、集中してできる限りのことは吸収しようという積極的な姿勢も窺えた。保健師業務の一つである健康危機管理を間近にみることで、保健師就業に向けての意欲が高まり、現場の保健師が非常に多忙な状況の中で、それでも自分たちのために時間を費やしてくれていることに感謝していた。

『コロナ禍での就職活動』への影響については、対

面授業が始まる前に公務員試験が開始されていたこと、面識のない教員に就職相談がしづらかったこと、例年と異なる採用試験の方法など、採用側の問題、学校での就職対策の問題、学生の心理的な問題等が挙げられた。一方、COVID-19による保健師の人材確保の観点から採用枠が大幅に増加したことが利点として語られた。

保健師がCOVID-19の対応に追われて平日の夜中や休日まで働き、疲弊している映像がテレビ等で流れるのを見て、学生は就業してから自分が役に立てるのだろうかという不安や申し訳なさを感じていた。同時に、社会で今まさに必要とされている業務に一生懸命取り組んでいる先輩保健師の姿を誇らしく思い、保健師として従事することを前向きに捉えている様子が窺われた。学生は『自分が大変な仕事につくことへの不安』と『社会で認められる仕事につくことを誇らしく思う』という気持ちを併せ持っていることが示された。

4. 不安を抱きながらなりたかった保健師になる

ここでは、『さあ！これから保健師として現場へ』という概念が抽出された。平時でも就業への不安はある。コロナ禍で学んだ学生は、十分な知識や技術を獲得できないまま就業することへの不安と申し訳なさを抱えていた。また、採用枠が増えたことで就職には有利であったことを喜びつつ、それゆえに即戦力として期待されていることも感じ取っていた。

IV. 総合考察

1. 本研究から得た知見

(1) 自粛で始まり自粛で終わった一年間

一年課程の教育機関で学ぶ保健師学生は、COVID-19の影響を受けて、【自粛で始まり自粛で終わった一年間】を過ごすこととなった。2019年度の時点で、一年間で保健師資格を取ることのできる教育機関は、短期大学5校（定員135人）、専修学校17校（定員690人）と、保健師教育機関全体（290校9,458人）のなかで、施設数で7.8%、定員数で8.7%と共に非常に少ない状況である⁸⁾。そのため、このような教育機関には地元の学生だけでなく遠方から入学する学生も多い。慣れない生活環境で、また友人知人が近くに居ない状況で自粛を求められた入学直後から対面授業が開始するまでの期間が、学生にとっては最も気持ちが沈んでいた時期であった。なかでも、看護師経験のある学生は、キャリアを中断してまで修学する道を選択

したことが自体間違っていたのではないかと悩んでいた。平野ら⁹⁾が医療系大学の2020年度新入生を対象に精神的健康度を調べた研究では、精神的健康度は良好であるものの、参加者特性の傾向として決断力が低く不安を感じている者の存在が示唆された。これから新しく学ぶという不安と期待が入り混じっている時期での自粛は、自分の決断に自信を持つことができず、不安が助長されることが本研究でも示された。

東京大学の学生を対象にしたCOVID-19に関するストレスについての調査¹⁰⁾では、COVID-19関連のストレスの原因として最も多かったのは「外出できないこと」と「対人交流がないこと」であった。なかでも、学部1年生は、「オンライン授業」「会えない」「友だち」という言葉との関連が強く、同級生に会えないことのストレスやオンライン授業での負担などを想像することができる。本研究においても、同級生と会うまでの期間は、授業のわからない部分も自分だけがついていけないのではという不安に駆られて、より孤立感を募らせていた。

対面授業が開始されたあとは、短期間に授業・演習・実習・研究・就職活動を実施しなければならないため、学生は非常にタイトなスケジュールをこなしていた。この間は、「いっぱいいっぱい」「しんどかった」「忙しかった」という言葉で表現されており、目の前にあることを何とかこなしていたという状況であったが、不安や心配といった言葉はほとんど表出されなかった。入学から遠隔授業までの期間に感じた不安や孤立感が低下し、多忙を極めながらも学生として自分がやるべきことを見極め、遂行している姿が映し出されていた。忙しいなかでも目標に向かって進んでいることを実感している時期でもあった。

その後、遠隔授業と対面授業を組み合わせたハイブリッド型授業が展開された。同じ遠隔授業でも、対面授業が開始するまでとは異なり、孤立感は和らいでいた。数日後には皆に会えるという見通しと、不安なことがあればLINE等で友人に相談することができるという安心感を得ることができていたのであろう。

夏期休暇中、遠方から来ている学生の多くは実家に帰省することもままならなかった。都道府県をまたいでの移動を自粛するよう促された緊急事態宣言発出中は勿論のこと、それ以外の期間も極力帰省しないよう心掛けていた。なかには、地元の自治体の就職試験を受ける際にも実家に戻らずにホテルに宿泊する者もいた。畠山ら¹¹⁾は、住民の移動自粛要請の一環として実施された自動車ナンバー調査や都道府県境での体温

チェックは結果として自粛警察による監視を促すことになったと指摘している。また、岡本¹²⁾は、コロナ・バッシング症候群という概念について、地域間格差があり感染リスクの高い都市部より地方に発生しやすく、その影響は家族、親族にも及ぶとしている。まさに、このような社会情勢が緊急事態宣言が解除されてもなお実家に帰省することをためらう要因となっていた。

授業・実習・研究がすべて終了した後は2月中旬に実施される保健師国家試験に向けて対策を行うことになる。例年であれば互いに励まし合い、教え合うなどの共同学習を行ったり、図書館等で勉強している人の姿を見ながら自分を奮い立たせたりして学習を進めているところであるが、コロナ禍では学生の多くは自宅で孤立感を抱えながらも、自身の気持ちや行動をコントロールしながら国家試験対策を行っていた。

このように、学生は入学から卒業まで一年間を通して自粛生活を送っており、遠隔授業のみの期間や長期休暇、国家試験対策期間など学生同士で集まることのない期間に孤立感を抱えていた。これらの孤立感は時期により変化しており、同級生と出会う前の遠隔授業のみの時期の孤立感が最も大きく気分の落ち込みが大きかったが、最初の対面授業以降は、学生同士や教員と会う機会の有無により変化し、その幅は徐々に小さくなっていった。孤立感が小さくなるにつれて、学生の自律心が確立し、自らの心理状態や行動をコントロールすることが可能になっていた。

(2) 慣れない遠隔授業に対応する

2020年はまさに授業形態の変革の年となった。大学教育における特例措置として、面接授業に相当する教育効果を有すると大学等が認めるものについては、自宅における遠隔授業等弾力的な運用が認められることとなった¹³⁾。遠隔授業の中でも多用されているオンデマンド型は何度も視聴できるというメリットがあり、聞き漏らした箇所や難解な箇所を繰り返し聞き、理解を深めることが可能である。反面、集中力が続きにくいといったデメリットも指摘されている。本研究においても、同様のメリット・デメリットが示された。デメリットについては、教員側が遠隔授業に慣れておらず学生が集中しやすい授業を作れていないということも要因の一つである。間瀬ら¹⁴⁾は、2020年度の遠隔授業は緊急避難的措置という色合いが濃く、準備期間の短さから質の面についてはある程度は致し方ないという側面があったと指摘している。つまり、教員側が経験を蓄積し、遠隔授業のスキルを高めることで、改善される可能性も高いといえる。Zoomなどを活用し

たオンライン型の授業については、孤立感が強い入学初期の頃は有効であるといえる。これから共に学ぶ仲間と繋がりたいという思いを持っている学生が多く、オンラインで顔を見ながら会話をし、学修にも、学校の雰囲気にも馴染んでいくというプロセスが必要である。その際、教員がうまく介入しながら徐々に学生同士で話せる機会を増やしていくといった方略が効果的であるといえよう。

(3) 「保健師になる」というゴールに近づいていく

【学び初めから地域臨地実習へ】と向かう学修の経過に伴い、心理的な変化が表われていた。さらに、臨地実習を境として保健師活動をより身近なものとして感じられるようになり、【保健師活動を我が事として捉える】ようになっていた。このカテゴリーを形成している概念は、コロナ禍ではない時期にも該当するものが多く、平常時の保健師教育にも応用できると考える。

一年課程の教育機関に通う学生は世代、看護師経験の有無、出身地域、卒業した看護師教育機関の種類など多様であり、そのような環境で学ぶことへの不安を感じると同時に、保健師になるための学修に期待感を抱いていた。特に、具体的な保健師像を描いていた学生からは学ぶことへの期待が多く語られた。また、入学後、数か月の遠隔授業のみの期間を経て、同級生と初めて対面する緊張とうれしさを実感していた。これらは通常であれば入学と同時に体感することであるが、コロナ禍では対面授業が始まるまでの孤立感を体験したがゆえに、その緊張とうれしさは増大していた。

臨地実習は、保健師教育機関の学修のなかでも非常に大きなウエイトを占める。野村¹⁵⁾は、実習時の経験は看護観や職業選択、生き方に影響を与え、卒業後最も記憶に残る授業となりえるものであると述べている。臨地実習は、保健師学生として初めて地域で活動する保健師に出会う場であり、漠然と思い描いていた保健師活動が具現化される場でもある。

対面授業開始後、程なくして臨地実習に向けたグループ活動が開始された。互いの性格や背景等を知らない状況下で開始した協働作業では、年齢幅のある集団成員の中での自分の立ち位置を考慮し、他メンバーの考え方を把握しながら、自分に求められる役割を実践していた。このように周囲に配慮しながらの作業ではあったが、協働作業による成果が形になるにつれ、「みえない壁」が取り払われ、一緒に実習に臨むという気運が高まっていった。藤尾ら¹⁶⁾は、臨地実習における他学生の存在は、学習を促進する存在になると同

時に、相互の関係性によっては学習が障害される可能性がある」と述べている。実習の準備作業を進めていく過程で、教員は一人一人の学修背景を考慮し、思いを傾聴するとともに、グループでの達成感が得られるような関わりが求められる。

実習地では実習期間短縮による学生の不安を少しでも軽減できるよう、実習指導者等が学生の参加可能な事業実施日を実習日に設定したり、学生同行可能な訪問先を探したり、健康教育を実践できる集団に声をかけたりと、学生がこの期間を有意義に過ごせるような配慮もあった。実習期間中、実習指導者が何度も控室に足を運び、各種事業の詳細や目に見えにくい保健師活動について説明するなど、多忙な中でも心配りをしてくれる先輩保健師の姿に、学生は対象者に対する保健師の姿を重ね合わせ、保健師像を具現化していた。短期間での実習を前向きに捉える発言もあり、短いかからこそ有効に使いたいと自らを奮い立たせている姿も映し出された。臨地実習は短期間になったが、全くゼロになったわけではない。臨地実習に向けた準備、臨地でしか学べない内容の選定など効果的に学べる環境づくりと、経験した実習内容に関連した保健師の動きや住民との信頼関係、COVID-19 影響下における課題の推察等、学内での学修の深め方により臨地実習がより充実したものになるであろう。

ところで、就職活動を行うにあたって、学生はさまざまな困難に直面した。採用側の問題（採用試験の時期及び方法の変更等）・学校における就職対策の問題（オンデマンド型対策講座等）・心理的問題（感染源にならないための対策と配慮・家族や友人に会うことすら躊躇する）等があり、それぞれの問題に対応しながら就職活動を進めていた。自治体の採用試験は5月頃を皮切りに9月頃までに開始するところが多く、一年課程の教育機関では入学早々就職活動を開始することになる。対面授業が開始していない期間に、書面や電話等で就職試験のことを見聞きしても自分のこととして捉えることができず、願書提出の時機を逸した学生もいた。一方で、保健所等の恒常的な人員体制強化に向けた財政措置¹⁷⁾により、保健師を増員する自治体が多く、自治体常勤保健師の採用人数が増加した。厚生労働省¹⁸⁾によると、令和3年9月時点の自治体の常勤保健師数は37,126人となっており、前年度比2.7%増である。なかでも都道府県4.7%、保健所設置市・特別区5.8%と増加率が高く、保健所を有する自治体はいずれも増加していた。令和2年度は年度途中で保健師を追加募集する自治体も多く、春先に時機を逸した

学生も再挑戦することができるなど、例年よりも低くなった倍率等コロナ禍で就職活動をするもののメリットもあった。

年間を通して、テレビやネットニュース等で COVID-19 の対応に迫られる保健師の姿を見て、卒後保健師として従事する学生は、その状況下に自分が入っていくことの不安を語っていた。それは身体的・精神的負担への不安だけではなく、自分がその職場で役に立てるのかといった申し訳なさもあり、実習等で十分に知識や技術を獲得できていない自己を低く評価する傾向にあった。一方で、普段はあまり脚光を浴びることのない保健師活動が、COVID-19 により広く世間に知られるようになったことを前向きに捉え、社会で必要とされている業務に一生懸命取り組んでいる先輩保健師の姿を見て誇らしく思っていた。学生は目の前に迫った保健師として就業するという現実には不安と喜びという両面的感情を抱いていた。

(4) 不安を抱きながらなりたかった保健師になる

両面的感情を抱いて、学生は保健師として現場へ出て行くことになる。臨地実習が少ないままコロナ禍で採用された学生は、保健師としての自己評価が低くなる可能性がある。藤原ら¹⁹⁾は、平常時に一年課程の教育機関で学んだ卒業生を対象とした調査を実施している。その中でほとんどの卒業生が、「3 週間の臨地実習」及び「家庭訪問」について深まりの大きな学びであったと回答していた。また、藤原ら¹⁹⁾は、学生が多忙なスケジュールをこなしながらも専門的知識を習得したことや生涯に通じる友人を得たことなど人と知識と技術を獲得したことが自信に繋がっていると述べている。コロナ禍においては、臨地実習短縮に加えて家庭訪問実習が大幅に削減されることになり、学生自身が学びの深まりを実感できなくなっていると考えられる。さらに、自信に繋がるはずの知識・技術の習得が十分ではなく、友人との交流が制限されたことなどが自己評価の低さに影響を与えていると考える。

川端ら²⁰⁾は、行政で働く新任保健師は効果的な支援方法がわからない、担当地域が把握できない、あるべき姿を実現できない自分に気づき自信を失う等の困難を抱えていると指摘している。また、頭川ら²¹⁾は、学士課程卒業後の保健師が新任期に感じる困難として、相談の際の知識・技術不足が最も多いと述べている。本研究から、コロナ禍で学んだ学生が保健師として従事した際には、新任期に抱える知識・技術不足に関する困難感がより強くなり、保健師としての自己肯定感が高められにくくなることが推測される。入職後で

るだけ早期に実践を兼ねた OJT を行い、めざす保健師像に少しでも近づいている自己を感じてもらう必要がある。さらに、教育機関は、学内実習を臨地実習の補完としての役割だけでなく、健康危機に直面している状況で公衆衛生看護を学修することのメリットを伝え、自信を持って卒後活動できるよう教授していく必要がある。

最後に、一年課程の保健師教育機関に入学する学生の多くは、看護師国家資格を取得しており、その利点を活かして積極的疫学調査等看護師資格で実施できる業務を長期休暇中や週末等可能な範囲で実施できれば、保健所等での活動をより実践的に学ぶことができると考える。

2. 研究の限界と今後の課題

本研究では、インタビューに快諾してくれた学生を対象としており、保健師教育全般に対して不快感を抱いている学生はいなかった。そのため、あらゆる状況にある学生の心理プロセスを表しているとは言い難い。また、研究参加者数が少なく 1 養成機関に限られているため語りの内容に個人差があることが否めない。今後は、プロセスにおける個人差を検討する必要がある。さらに、コロナ禍で学修した学生が卒後保健師となり、公衆衛生看護活動を行う際にどのような困難感を抱くのかなど未知の部分が多い。コロナ禍で学修した学生が保健師として従事した際の自己評価等を明らかにし、新任期以降の研修に役立てるとともに、平常時の保健師教育課程の学修内容に反映させていきたい。

V. 結 語

本研究で以下のことが明らかになった。

- 1) 入学直後の不安と期待が入り混じっている時期での自粛は、自分の決断に自信を持つことができず、不安が助長されることが示唆された。自粛の一年間のうち、同級生と会うこともできず一人で学ぶ期間に最も孤立感を抱いていた。
- 2) 遠隔授業については、繰り返し視聴できるオンデマンド型授業で学修を補完し、繋がることを可能にするオンライン型授業で孤立感を抱く学生にアプローチすることができる。遠隔授業はポストコロナにおいても活用できるツールであることから、教員は経験を蓄積し、遠隔授業のスキルを高め、適宜活用することが求められる。
- 3) 十分に知識や技術を獲得できていない学生は、職

場で役に立てるのかといった不安を感じ、自己評価が低かった。同時に保健師がCOVID-19により世間に周知されるようになったことを前向きに捉え、社会で必要とされている業務に奮闘する先輩保健師の姿を誇らしく感じていた。

- 4) コロナ禍で学んだ学生は、知識・技術不足に関する不安が強く、保健師としての自己肯定感が高められにくくなることが推測される。入職後できるだけ早期に実践を兼ねたOJTを行い、知識・技術を向上させることにより、自己肯定感を補う必要がある。さらに、教育機関は健康危機に直面している状況で公衆衛生看護を学修することのメリットを伝え、自信を持って卒後活動できるよう教授していく必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆さまに厚く感謝申し上げます。

開示すべきCOIはない。

参 考 文 献

- 1) 厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 診療の手引き第4.1版. 2020 [引用 2021-01-04]. URL : <https://www.mhlw.go.jp/content/000712473.pdf>
- 2) 文部科学省・厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について. 2020.2.28 [引用 2021-01-02]. URL : <https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>
- 3) 文部科学省・厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について. 2020.6.1 [引用 2021-01-02]. URL : <https://www.mhlw.go.jp/content/000636112.pdf>
- 4) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会. 保健師養成の方法. [引用 2021-01-04]. URL : <http://www.zenhokyo.jp/foryou/yousei.shtml>
- 5) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会. 公衆衛生看護学モデル・コア・カリキュラム 2017. 2018 [引用 2020-12-30]. URL : <http://www.zenhokyo.jp/work/doc/core-curriculum-2017-houkoku-2.pdf>
- 6) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い——. 東京: 弘文堂; 2003.
- 7) 木下康仁. ライブ講義 M-GTA —— 実践的質的研究法 ——. 東京: 弘文堂; 2007.
- 8) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会. 保健師教育における大学院カリキュラムモデル (全保教版 2020). 2020 [引用 2021-05-30]. URL : https://www.mext.go.jp/content/20210323-mxt_igaku-100001205_2.pdf
- 9) 平野正広, 荒井沙織, 武内朗ほか. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) による緊急事態宣言下の外出自粛期間中における授業開始前の大学新入生の精神的健康度. 了徳寺大学研究紀要 2021; 15: 153-66.
- 10) 東京大学ピアサポートルーム. 「新型コロナウイルス感染症に関するストレスについてのアンケート」結果公表. 2020 [引用 2021-11-01]. URL : <https://ut-psr.net/2020/07/07/stress02/>
- 11) 畠山輝雄, 駒木伸比古. 緊急事態宣言に伴う移動制限に対する地域概念からの考察. 日本地理学会発表要旨集 2020; 2020a(0) : 103.
- 12) 岡本悦司. この国に生まれたるの不幸 —— コロナ・バッシング症候群 (CBS) ——. 日本医事新報 2020; 5029 : 56-7.
- 13) 文部科学省. 遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について. 2020.5.1 [引用 2021-01-04]. URL : https://www.jda.or.jp/dentist/coronavirus/upd/file/20200507_coronavirus_enkakujyugyo_toriatsukai.pdf
- 14) 間潤泰尚, 中植正剛, 酒井純. 新型コロナウイルス禍で見直す大学の授業の在り方 —— オンライン授業に関する教員アンケートの結果から ——. 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要 2020; 6 : 19-28.
- 15) 野村美千江. 実習指導の原理 —— 公衆衛生看護学実習が授業として成立するために ——. 保健師教育 2018; 2(1) : 10-25.
- 16) 藤尾麻衣子, 藤谷章恵, 大武久美子ほか. 臨地実習において学生同士が互いに及ぼす影響に関する文献研究. 武蔵野大学看護学研究所紀要 2018; 12 : 31-9.
- 17) 厚生労働省. 保健所等の恒常的な人員体制強化に向けた財政措置. 2020 [引用 2021-11-10]. URL : <https://www.mhlw.go.jp/content/10901000/000746019.pdf>
- 18) 厚生労働省. 地域における保健活動の推進に向けて. 2021 [引用 2021-11-20]. URL : <https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000843133.pdf>
- 19) 藤原恭子, 國本政子, 福岡悦子ほか. 地域看護学専攻科閉校における修了生の統合的な学びとスキル習得の現状と課題 —— 1期生から9期生の質問紙調査報告 ——. 新見公立大学紀要 2013; 34 : 121-4.
- 20) 川端泰子, 千田みゆき. 行政で働く新任保健師の困難に関する文献検討. 埼玉医科大学看護学科紀要 2019; 13(1) : 41-7.
- 21) 頭川典子, 安田喜恵子, 御子柴裕子ほか. 学士課程卒業後の保健師が新任期に感じる困難と対処状況. 長野県看護大学紀要 2003; 5 : 31-40.